２０２３年１１月５日　説教『神は独り子を』　　高橋克樹 牧師
聖書　創世記３章１～１５節、ヨハネ福音書３章１３～２１節

ヨハネ福音書３章１６節の「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」という御言葉は、キリスト教信仰の要の言葉です。皆さんから見て講壇左の掛け軸にある言葉も、その御言葉が賀川豊彦牧師の手によって書かれたものです。青戸教会を創設した中山真多良牧師が尊敬していた賀川豊彦牧師の葬儀が１９６０年に青山学院の礼拝堂で行われたのですが、最近、その葬儀の順序のコピーを見たのですが、そこでは中山真多良牧師が新約聖書のヨハネの第一の手紙４章７～１３節の聖書朗読をしておられました。司式は新約学者の黒田四郎牧師で、式辞（葬儀説教）は明治学院院長の都留仙次、弔辞は日本社会党委員長の河上丈太郎（じょうたろう）ら５人で、名だたる牧師たちが葬儀に関わっていました。私が想像するに、おそらく新約聖書のヨハネ第一の手紙４章７節～１３節は賀川牧師自身が生前に選ばれていたように思います。

さて、私は賀川牧師にお会いしたことはもちろんないのですが、いろいろな話は先輩牧師から聞いております。掛け軸を見てもわかるように達筆です。実際に講演では模造紙を何枚も用意して講演内容の核心部分をその模造紙に書いていたというのです。ご存じの方も多いと思いますが、賀川牧師はノーベル平和賞の候補者だったことが知られています。活動の幅も広くて、労働運動や農民運動に関わり、生活協同組合を主導したことでも有名で、第一次世界大戦後の不況で苦しむ人々の生活安定のために生協を創設した人物です。日本で最初のベストセラー小説となった「死線を越えて」の作者でもあります。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」という御言葉には、神が主イエス・キリストをこの世にお遣わしになった理由が端的に言い表されています。神がこの世を愛するのはなぜか？　神が創造主であるならば、ご自分がつくったものを愛するのは当然のことかもしれませんが、どうもそれだけの理由ではないようです。神は確かに被造物を創造されましたが、その創造の仕方はある意味特殊で、被造物に自由な意思を与えて、神を信じるか否かについても、被造物である人間の自由な意思に任せたのです。このように、人間の自由意志を与えた結果、人間は罪あることに身を任せる結果に陥り、その罪を贖う必要性に迫られたのです。そのために、神は独り子イエスをこの世に遣わすことになったのです。そして、その目的は一人も滅びないで永遠の命を得させるためであったとヨハネ福音書は言うのです。

永遠の命を得させるという永久不滅の生物学的な命を与えるという意味ではなく、神に生かされた命が死後も続くという意味です。永遠の命というのは、神に生かされた命ということで、私たちがこの世で死んだのちも、神によって生かされた命を天上にあって過ごすということなのです。

永遠の命の「永遠」とは、変わらずに貫かれてきた神の愛のことです。ですから、永遠の命というのは、神の愛の中に生きることです。この世にある私たちも、既に召された者たちも、共に、この神の愛の中に生かされているのです。そのような命のことを永遠の命と言い表しているのです。そのように神がこの世を愛しておられるので、神の独り子であるイエスをこの世に遣わして、神ご自身の愛の姿を教えられたのです。けれども、イエスの弟子たちも、イエスを歓迎して受け入れた者たちも、本当のイエスの心（＝それは神の御旨でもあるのですが）を理解することができず、十字架にかけてしまうに任せてしまった。けれども、神は死んだイエスを復活させて、もう一度イエスとやり直す人生を弟子たちに、そしてその弟子たちを通して福音を信じる者とされたすべての人に与えたのです。この意味で、イエスの復活は新たな気持ちで神の愛と共に歩んでいく関係を修復させるものとなったのです。安堵か申し上げてきたことですが、イエスの復活は神の力によってなされたことです。ですから、復活はすべて受け身形で書かれています。イエスがご自分の力で復活したわけではないのです。このように、神はご自分の独り子をこのように派遣して、ご自分の御旨を知らしめようとなされたのですが、弟子たちも歓迎して受け入れ

た者たちも十分に理解することができずに、独り子イエスは十字架上に死んだのでした。けれども、神がこの世を愛する思いは強く、イエスを死人の内から復活させて、もう一度、イエスと共に歩んでいく人々を人間の布教する力に委ねてつくり出していく道を選んだのです。

そういう意味で、神の愛は忍耐強い。そして、福音を信じる者たちが人間的な力で福音伝道していくことをその自由意志に委ねられたのです。そのような神の愛を端的に言い表す御言葉として、この「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」という御言葉に集約されているのです。

今、連日イスラエル軍とハマスの戦闘の様子が報道されていますが、インターネットでもイスラエル側に立つ人々によってハマスを攻撃する内容がたくさん溢れています。私は3度、聖地旅行でイスラエルに行っているので、少しは現地のことが実感としてわかるのですが、以前からパレスチナに住んでいたパレスチナ人（人種的にはアラブ人）の人たちは、空爆を受けているガザ地区だけでなく、いわゆるイスラエルの国内にポツンポツンと区切られた地域で済んでいるのです。これまでのイスラエルとアラブ諸国との戦争でパレスチナ人が国連で定められた地域に住んでいた所を実行支配しているんです。私たちにとってイエスが生まれた場所であるベツレヘムに行くためには、８ｍぐらいの塀の内側のアラブ人が生活しているところにイスラエル側から入らなければならないので、イスラエル軍の了解を取って、また、パレスチナ側の了解も取ってやっと訪れることができるのです。

イスラエルは観光業が重要な資源なので、聖地旅行の人たちには寛容で、そのためにイスラエルの国内の様子を写真で撮ることは、基地でない限り問題ありません。私たち日本人が聖地旅行をする際は、現地に住む日本人に案内してもらうのですが、パレスチナ人が住む地域に入る際は、支援物資をもっていきます。そして、現地で買い物をするわけです。いつも、クリスマス時期に飾る聖家族のクリブも、そのベツレヘムで買ったものです。彼らパレスチナ人たちは、クリブなどを造って聖地旅行の一団に売って生活費を稼いでいるのです。

あのパレスチナ問題は端的に言えばイギリスが悪いのです。あの地域は第二次世界大戦後はイギリスの委任統治地域でした。大戦中にナチスによって６００万人のユダヤ人が殺されました。そこで、世界的な同情心から、流浪の民であるユダヤ人に国家をつくってあげようという機運が生まれたのです。その際に、イギリスはパレスチナにユダヤ人国家をつくることを了承したのです。しかし、そこにはパレスチナ人が長らく住んでいました。にもかかわらず、イギリスはパレスチナ人にも、イスラエルが建国されても住み続けることができると言っていたのです。この優柔不断さが露呈して、イギリスはこの問題を国連に丸投げして、問題解決をせずに逃げてしまったのです。イスラエルが建国された当初は、イスラエルはアラブ地域に孤立して浮かぶかわいそうな国という認識を世界は持っていたのですが、アラブ圏の国といざ戦争をしてみると、イスラエル軍が勝利に勝利を重ねて、現在のようになったのです。いずれにしても、神はこのような戦争によって人間が殺戮されていく状況に御旨を痛めておられることは明らかです。賀川牧師は世界平和のために尽力されました。先ほど賀川牧師の葬儀の際に中山真多良牧師が聖書朗読したとヨハネの手紙一の４章７節（４４５頁）を見ると、小見出しに「神は愛」とあって、神が独り子イエスを遣わした理由がまとめて書かれています。『7愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出る者で、8愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。9神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内にしめされました。10わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。11愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。12いまだかって神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまって下さり、神の愛がわたしたちの内で全うされているのです』

神の愛が私たちの内で全うされるように、御旨を訪ねつつ、今週も神と共に歩んでゆきましょう。